

戦時下におけるわたしの体験

長崎県佐世保市 原竹 正行

出征兵士の留守農家に田植、芋掘り、稲刈りに駆り出され、芋・南瓜・大豆粕・雑炊・団子汁など僅かな食料で育てられる少年にとって、農家での白いお米のご飯と野菜煮込み料理を腹いっぱい食べたことは忘れることができない。

・勤労働員学徒

戦争が日々拡大し、学生たちも軍需工場の生産の加担に明け暮れ、国民学校でも進学組と勤労組に区別され、北松の炭鉱に級友30名と共に動員された。選炭場から出るボタをトロッコに積み、押して田んぼに捨て入れ、石炭輸送の敷設作業である。労働は過酷で、また危険な作業であった。雨の日は選炭場の粉塵と騒音に悩みながらも、ボタ搬送より楽な仕事であった。週1回の登校日は友達と先生に会えるのが嬉しかった。

・船舶による石炭輸送

学校を卒業して海運会社に就職した。積載トン数100tの運搬船で、船長・機関長3人乗組員により、北松の炭鉱から火力発電所、大村航空廠、小串魚雷試験場、佐世保第三海兵団への石炭輸送である。揚炭中、ボート漕ぎ、教練、マル四艇特攻船艇訓練を見かけながら、大村から坑木を満載して北松地域の炭坑へピストン輸送であった。

・船舶と乗組員に徴用令状

海運会社より徴用令状を船長が緊張した面もちで受領してきた。「暁部隊船舶輸送部」山口県油谷基地へ至急着任せよの書状である。金比羅丸、太洋丸の6名は、会社の協力を得て燃料油・予備品・船具・食料・飲料水など準備に奔走した。

6月18日、2隻の徴用船は、佐世保港を夜、山口県へ向けて出帆。平戸海峡を過ぎ、唐津沖の神集島に寄港。乗組員は住民の先導により、素足で神社に航空安全を祈願。素足で参拝すると念願が成就する習わしとのこと。軍の司令により博多港に深夜投錨した。

・福岡空襲の直後に入港

6月19日、福岡大空襲によって、福博の街は焼失して廃虚と化し、瓦礫から薄煙がたち異様な臭気が海岸周辺に漂う波止場で、ただ茫然とするのみであった。船長は軍司令部へ上陸して帰ると、『準備でき次第、食料、衣服類、生活物資などを支給する。船舶警備に武装した朝鮮出身の兵士6名を乗船させる』という。午後積み荷と兵士が車で到着して、出港したが、強風のため相島に避難。夕食後兵士の母国の話題が弾む。星空に涼を求めて甲板に寝るが、空襲被害の惨状を見て眠れなかった。

朝風に出帆、漁火が見えて明け方響灘に入り、艦載機の飛来が気になる。油谷湾は波もなく、リズムカルなエンジンの音と白い航跡を残してゆく。湾内に2000t級の輸送船が停泊、夕陽に船隊を染めている。午後油谷に無事着岸した。船長と兵士は本部へ上陸した。

・米と大豆の運搬作業

明日からの船舶運航と作業要領、乗組員の服務などについて船長から報告があり、魚肉缶詰、野菜料理で着任を祝する夜となった。翌朝8時、6名は陸上に集合。上官の訓話と現場担当下士官の説明によると、湾内に停泊の輸送船で朝鮮半島より輸入した米と大豆を船に積み陸揚げする作業で、朝鮮出身の兵士40名が荷役をする。一俵50kgを背負い、船の道板を利用して運搬し、1日約50tで1航海として本日より作業開始の命令が下された。

・輸送船の沈没に救助命令

荷揚げ作業が終わって夕食の時であった。輸送船が米軍の潜水艦に撃沈され、救護兵10名が乗り込み、僚船と漁船が追随し、全速力で現場へ向かう。薄暗い海面に救命ボート漂流、救命器具をつかみ助けを求め叫ぶ人の群れを発見。救護兵が甲板に引き揚げ、服を切り開き応急処置をする。甲板は鮮血で染まり、米軍艦載機の飛来を気にしながら救助を急ぐ。戦争の悲惨な現場に、激しい恐怖心に耐え、任務に傾注した。帰港中、支給品の紅茶、缶ジュース、果物缶詰を食品庫から出して戦場の人々に手渡す。救助された人は51名。7月7日の出来事であった。

・空襲警報と救助隊の活躍

負傷兵19名は病院へ移送され、残りの兵隊さんは国防婦人会から出された浴衣に着替え、漂流で冷えきった身体を焚き火で暖め、婦人会、消防団員と会話中に空襲警報のサイレンが鳴り、消火して防空壕に駆け込んだ。救助隊の活動が遅れていたら大変な事になっていたであろう。

・徴用解除を受けて

8月の太陽が照りつけ、汗を全身に滴らして黙々と働く兵士達は、食事と昼休みが一番楽しみと私に言う。全員が飛沫を上げて泳ぎ、日焼けした笑顔が印象的であった。軍部から「終戦」を伝達されると、兵士全員は日本が戦争に負けることはない、「アイゴ、アイゴ」と海に向かい両手を上げて泣き叫んだ。軍本部から徴用解除の文書を受領したのは、終戦の日から3日後であった。

・引揚船の中で

朝鮮人、婦人、女子を含む150名を乗せて釜山へ最後の航海となり、佐世保港を12月10日出帆。壱岐水道を過ぎた頃、風が強くなり対馬海峡は大荒れ、乗客は酔い、対馬の竹敷に深夜入港した。翌朝船内で出産があり、産婆を呼びに走り回って船に案内した。荒れ狂った海峡の船内で十数時間余り、出産を近くにして婦人はどんな心境であったかと思いつつ産湯を沸かした。産後の処置を終えた母親と女の新生児を船室に寝かせて正午出帆。晴天なれど朝鮮海峡は波が大きく、船は上下に揺れ、釜山港に午後3時着岸した。民族衣装に着飾った149名は「アイゴ、アイゴ」の歓声が船上に響き、手を握り肩を抱き合って喜び、国境を越えドラマチックな瞬間であった。大きな荷物を両手に、懐かしの古里へ故国の土を踏み締めて行く人々の姿を岸壁で見送った。

買い物に上陸、年の瀬の市場、街通りは混雑していた。米・新鮮な魚肉・野菜・玉子を買ひ、温かい料理を母親に差し出すと、産後と祖国に着いた安心感で美味しそうに食べ、哀願して4、5泊させて欲しいと言う。船長は『風が強いので出港できないから良い』と返事をした。船で子供が産まれると縁起が良いとされ、習わしにより相川船長が「あい子」と命名した。食事と洗濯の世話をし、5日後、あかちゃんを白い布地で背にくるみ、故郷へ向かう趙さん親子を雪の降る釜山港で見送った。

『あれから50年』、対馬の船内で生まれたあい子さんは韓国のどこに住んでいるのか、元気であればちょうど50歳になる。そして母親は75歳に近い。親と子に会ってあの日から今日までの歳月を語り合いたいと思う。